学校の機能と役割（小考）

小野塚　恒男

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、ほとんどの学校が二月末から休校に入った。

新年度以降もつづいた休校期間に、あらためて学校の機能や役割について考えた人もいるのではないか。

ここでは、内田樹（たつる）神戸女学院大学名誉教授の著書からヒントを得て考えてみたい。（注）

（1）学校は　教育の場

学校教育法は「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする」（第1条）と規定している。

学校は児童・生徒・学生等を教え育む場であり、その目的は「人格の完成」（教育基本法第一条）にある。

・『おせっかい教育論』（内田樹・鷲田清一・釈徹宗・平松邦夫、１４０Ｂ）

「内田　学校教育を子供たちに授けることによって、最大の利益を受けるのは共同体そのものなんです。共同体を支える公民的な意識を持った人間、公共の福利と私的利益の追求のバランスを考えて、必ずしもつねに私的利益の追求を優先しないようなタイプの大人を、社会のフルメンバーとして作っていくということは、共同体の存続にとって死活的に重要なわけです」。

日本で18歳選挙が実施されたのは、２０１６年7月

の参議院議員選挙からである。若者の政治的無関心や政治離れを防ぐには「一歩前進」だったが、若者世代の投票率は依然、かんばしくない。

政府・文部科学省は教師に対して、過剰とも思えるほど「政治的中立」を要求している。そして、大半の教師は過剰とも思えるほど萎縮して、主権者教育の実践が困難になっているのが現状ではないだろうか。

（2）学校は　学びの場

学校は、学びの場である。知識・技能を習得する場であり、市民道徳を身につける場である。

その学びの場で、「クラス運営」を「クラス経営」とも表現するようになったのはいつからだったか。

学校がまるで企業のようになってしまったと、違和感を覚えた教師も少なくないのではないか。

全国一斉学力テストが企業の利潤追求のようにみえ、教員評価が社員の人事査定のようにみえてしまうのだ。

・『ぼくの住まい論』（内田樹、新潮文庫）「知性的・身体的な潜在能力をどうやって開花させ、引き上げてゆくか。いまの教育制度はこれをもっぱら利益誘導によって行おうとしています。成果を数値的に格付けし、格付け上位者には報酬を、下位者には処罰を与えるという「人参と鞭」システムです。自己利益の増大を求める欲望と、処罰を恐れる恐怖心が人間を成長させると、この教育方法の推進者たちは信じています。それはずいぶん貧しい人間理解だと思います」。

（3）学校は　いろいろな教師に出会う場

教師は厳しい環境におかれている。多忙化は年々ひどくなり、家に持ち帰る仕事も多い。こんな状況では教員志望者が減少するのも当然といえる。新潟県の2018年の小学校教員採用試験の倍率は1・2倍で、全国の最低だった。少子化時代のいまこそ、少人数学級を拡大し、教員の負担を減らさなければならない。

・『昭和のエートス』（内田樹、文春文庫）「子どもたちは「変な先生」からも学ぶべきことは学んだのである。それはどのような先生であれ、先生である限りその一挙手一投足のうちになにがしかの教育的情報が含まれているに違いないと私たちが信じていたからである。そのような信憑が定着している限り、誰が教師であれ、学びは起動するのである」。

高校時代には個性豊かでヘンな先生がいっぱいいた。

板書をまったくやらないで一方的にしゃべりまくる先生、授業と関係のない話ばかりで自分でも何を教えているのかわからないような先生、生徒相手でなく黒板相手に授業をしているような先生、などなど。

「〇大卒」とウワサされていた政治経済の先生は、目の前に生徒がいないかのように下を向いてブツブツつぶやいていた。

当時はもっとまじめに授業をやってほしいと不満をもっていたが、いまはなんだかなつかしい。真剣に教えてくれた先生の方が圧倒的に多いのだから、ただ、懐古するだけでいいのかもしれない。

・『下流志向』（内田樹、講談社文庫）「教育の現場は、均質的ではなく、訳のわからない人がぐちゃぐちゃとぐろを巻いている方がうまく機能するものです。」

・『最終講義』（内田樹、技術評論社）　「とくに大学には「マッド・サイエンティスト」が必需品なんです。なんだかわからないマッドな研究をして、ぶつぶつわけのわからないことをつぶやいていて、その人が近づいてくると女子学生たちが「きゃ～」と言って逃げ出すような、「ものすごく変な学者」というのは、アカデミアになくてはならない「季節の風物詩」みたいな存在なんです」。

（4）学校は　避難の場

学校は心身の避難場所である。教室はいうまでもなく、体育館やグラウンドなどの施設が、しばしば、豪雨災害や震災時の避難場所となる。２００７年７月の新潟県中越沖地震の際には、柏崎市内の82か所の避難所のうち、32か所が学校だった。

また、学校は保健衛生を保障する場であり、こころを休息させる場所でもある。

新型コロナ感染防止のため、全国のほとんどの学校が約三か月にわたり、休校を余儀なくされた。集団の中で授業を受ける、みんなと一緒に遊ぶ、部活動に励む等々の行為が、心身の安定にどれほど必要なことか明らかになったのではないだろうか。

・『街場の大学論』（内田樹、角川文庫）　「学校というのはそういうふうに人間を階層化したり差別化したり囲い込んだりするための社会的装置ではないと私は思う。むしろ逆だろう。人間をその出自からも、身分からも、階層からも、信教からも解放し、その差別意識を廃し、知的閉域からの自由を得させるための「逃

れの街」、「アジール」であるというのが学校の重要な社会的機能の一つではないのか」。

（5）学校はナショナリズムが発現される場

学校教育は外交や治安の維持と同様に国政の重要な柱であり、国はしばしば学校現場に干渉し介入する。

１９９９年の国旗国歌法の成立以降、「日の丸・君が代」の学校現場への押しつけと締めつけが厳しくなった。

新潟県では入学式や卒業式の「君が代」斉唱時の不起立の教員に対して、当初は、いわば暗黙の了解があったように思われるが、次第に不起立は「信用失墜行為」とみなされるようになり、十年ほど前には処罰を与えるまでになった。

・『ためらいの倫理学』（内田樹、角川文庫）　「しかし「君が代」を声に出して歌うものは、来賓を含めて数名しかいなかった。しん、と静まり返った体育館の中に小さな声とテープの伴奏音だけが響いていた。私はこの風景には現代日本人の実感がみごとに表現されていると思う。その場には、みっともないから「みな、大声で歌え」と怒鳴るものも、どうせ歌わないのだから「国歌斉唱なんかやめてしまえ」というものもいなかった。全員が「どっちつかず」の気まずさを静かに共有していた。国家の象徴を前にしたときのこの「気まずさ」、この「いたたまれなさ」が私たちの国家とのかかわりの偽らざる実感なのである」。

おわりに

国立成育医療研究センター「コロナ×こどもアンケート」中間報告（２０２０年5月12日）によると、「こどもたちの困りごと」１位は「お友だちと会えない」（76％）、２位は「学校に行けない」（64％）で、以下、「外で遊べない」（51％）、「勉強が心配」（50％）、「体を動かして遊べない」（44％）である。

子どもたちの心身の成長に、学校がどれほど重要な役割を果たしているか、数字が如実にあらわしているのではないだろうか。

（注）「内田樹の研究室」（２００８・８・７）…私自身は繰り返し申し上げているように、自分の著作物からの引用は「無償で、ご自由に」という立場を取っている。引用どころか盗用も剽窃も改作も「ご自由に」である。

（おのづか　つねお　所員）